



H・Nさん
わーくセンターの
頼れるリーダー

2019.11.1 No.59

ひゅうまん

～ふつうをささえる～

- ・弘徳学園MAP
～たんけん ぼくのしょくば～第2回
- ・相模原障害者殺傷事件から3年
- ・みなさんあの事件のことを
覚えていますか？
- ・お知らせ



弘徳学園MAP

くたんけん ぼくのしよくばく

「デイサービスセンターすまいる」

第1回でも書きましたがぼくが弘徳学園に就職して最初に配属されたのはデイサービスセンターすまいるでした。そんな印象深いすまいるを今回は探検していきます!!

「障害者施設のイメージを吹き飛ばす」

障害者の方と関わる仕事をほとんどしたこと無かったぼくの障害者施設のイメージは暗く陰湿なものであり、初日は期待より不安が大きかったのを覚えています(ぼくの勉強不足でイメージが昭和...)。

実際に働いてみると明るく清潔な室内、楽しい音楽、利用者スタッフの笑顔…。今まで自分の持っていた暗いイメージを吹き飛ばす革新的な情景でした(身内鼻唄ではなく正直な感想です)。

そんなすまいるはいつ、どのような経緯で出来たのだろっ? 同じ敷地内なのにとっして本店と赤坂店が

あるのだろっ?と大小様々な疑問が出て来ました。そこすまいる10周年記念冊子を探しだしてきてすまいるの歴史を探ってみました。

「たんけん!! すまいる!!」

1949年「精神薄弱」児童施設としてスタートした障害児支援施設が約半世紀で役割を終え、残った養護学校の分校で同高等部の生徒を対象に行った「夏のデイサービス」が「デイサービスセンターすまいる」の源流となったようです。

並々ならぬ困難の末…

2000年4月17日、国の許可を待たずデイサービスセンターすまいるが無認可でスタートとする。

2000年11月6日、国から認可される。

2001年5月、岡山市からの正式委託を受け、岡山県で初となる障害者のデイサービスが開所。

文字に書けば数行ですが県内初めての障害者のデ

イサービスという事で当時の担当者は並々ならぬ苦労があつたようです。詳しく書くとお堅い内容になると紙面が足りなくなるので割愛しますが利用者からのニーズ、スタッフの熱い思いがデイサービスセンターすまいるを誕生させたのは間違いなさそうです。岡山県における障害者のデイサービスのパイオニアが弘徳学園というのも驚きですが身の引き締まる思いにもなりました。

現在創立19年目のすまいるは地域交流に力を入れ、ワークの時間に作ったロウソクやサシエ(香り袋)、マドレーヌなどを『みんなのカフェ』で販売したり(買ってね)、市内の学校、専門校に向き互いに交流したりしているそうです。

最後にすまいるについてのトリビア

Q なぜ同じ敷地内にあるのに本店と赤坂店と名前が違うのか?

A 本店は現在の活動センターの場所にあり、利用者増加により2003年に赤坂店が旧西擁護学校跡地に開設、2007年に本店が現在の場所に移ってきた事により同じ敷地内で名前が違うそうです。

(菅田 治利)

相模原障害者 殺傷事件から3年

事件について、その後の対策は

今から3年前の2016(平成28年)7月26日未明、神奈川県障害者福祉施設「津久井やまゆり園」に元職員の植松 聖被告(当時26歳)が侵入し、用意していた刃物で入所者19人を刺殺し、他入所者や職員27人に重軽傷を負わせた。殺人事件の犠牲者数としては戦後最悪と報じられ社会に衝撃を与えた。

当時、津久井やまゆり園は、神奈川県相模原市緑区千木良の緑豊かな場所で、入所者157名(短期入所含む)がそこで生活をしていた。中には重い障害を抱えた人も多くいたそうだ。地域との絆を大切にして入所者の安全を考えていたであろう施設で事件が起こった。

被告について

植松被告は平成24年12月に非常勤職員として雇用され、翌年4月には常勤職員として採用され

た。採用後間もなく勤務態度や刺青のことなどで指導を受けることもあった。そして、平成28年2月に衆議院議長公邸に行き手紙を渡している。手紙には、「私は障害者総数470名を抹殺することが出来ます」「日本国と世界の為と思い・・・」「障害者は人間としてではなく、動物として生活を過す」しております・・・「私の目標は・・・保護者の同意を得て安楽死できる世界です」「障害者は不幸を作る」としかできません」「大麻の力は必要不可欠だと考えます」「職員の少ない夜勤に決行します」など他に要望することも書かれていた。

退職そして措置入院

その後、警察と園が植松被告への対応を協議し、2月19日に園内で面接した。そこでも植松被告は「自分の考えは間違っていない。仕事を続けることはできないと自分でも思う。」と言い、自主退職することになった。警察は、本人が警察官に対して「日本国の指示があれば大量抹殺できる。」などの発言を繰り返していたことを踏まえ、警察官職務執行法第3条に基づき保護して警察署に同行し、緊急措置診察のために、北里大学東病院に移送し、診察の結果、今後重大な問題行動の恐れのある躁状態と診断して措置入院となった。入院後には尿検査の結果、大麻成分が陽性と出ていた。

退院後は

措置入院から12日後の3月2日には、「経過観察する中で次第に妄想と易怒性、興奮性が消滅し、『あの時はおかしかった。大麻吸引が原因だったのではないかと反省でき、他害のおそれはなくなった。また、尿中大麻も検出されなくなった』ため、『措置入院者の症状消退届』が市に提出され、退院となった。その当日に、やまゆり園の近くで植松被告の車を見たという職員からの報告もあったそうだ。

そして翌日には、植松被告からやまゆり園に「退院した」という電話があり、これまでのお礼と退職手続きの進捗状況等についての話があった。その後、園は警察への報告と、防犯カメラ(16台)の設置をした。

5月30日には、茶髪になった植松被告を園内に入れて、退職金の受給手続きを行っている。時間をさかのぼるが、3月2日に措置入院から退院してから、植松被告は2度病院の外来を受診している。1度目は診断書の受領と抗うつ薬の処方、2度目は就労可否等証明書の受領をしている。その間、ハローワークで失業給付の手続きや福祉事務所での生活保護の申請をして、支給を受けている。植松被告が事件を起こした日までの間、植松被告は月に2〜3度両親宅を訪れ一緒に食事等もしていた。そして、7月26日事件が起こった。

事件の後の津久井やまゆり園は

事件のあった神奈川県では、事件の3日後には再発防止等対策本部を設置し、事実関係の把握や入所者・家族・職員等への支援や課題の整理等から始めた。その後、「津久井やまゆり園事件再発防止対策・再生本部」にて話し合いが持たれた。その中で、施設は建て替えの方向で話が進んだ。平成29年2月には神奈川県障害者施策委員会に、津久井やまゆり園再生基本構想策定に関する部会を設置し、「意思決定支援」「安心して安全に生活できる場の確保」「地域生活移行の促進」を柱とする部会検討結果報告書が提出され「津久井やまゆり園再生基本構想」にまとめられた。

意思決定支援に関しては、相談支援専門員、施設職員、サービス管理責任者、市・県の職員からなる意思決定支援チームを設置して行う。今後の暮らしを支える上で重要になってくる。

安心・安全な生活の場の確保については、施設の小規模化、複数の選択肢を用意することを目標に挙げている。防犯対策については、防犯ガラスの取り付けや警備会社と連動したセンサー付防犯カメラ、周囲に異常を知らせる防犯ブザーなどの整備をして、日頃からの警察との連携を図ることになっている。

地域生活移行の促進については、新たなグループ

ホームの開設やその支援が挙げられている。

津久井やまゆり園再生基本構想に基づき、県は横浜市港南区芹が谷地域において障害者支援施設を整備する「津久井やまゆり園芹が谷園舎(仮称)整備・維持管理事業」の実施に向けて取り組んでいる。

事件後は様々なメディアを通して事件の概要や社会の反響などが報じられていた。しかし、時間が経過するともにそれも少なくなり、事件の風化を感じざるを得ない状況になってきている。

弘徳学園機関誌での検証

弘徳学園では事件後の10月に機関誌「ひゅうま No.53」にて「検証!! 相模原事件」にて特集を組んだ。3人の職員がそれぞれの疑問に答えている。「なぜ元職員に19名は殺されなくてはいけなかったのか?」「なぜ、殺された障害者は匿名なのか?」「施設は誰から何を、誰を守ろうとしているのか?」「について答える中で現場職員の悩みや苦しみが見えるような内容になっている。弘徳学園のホームページでも読めるようになっていて、ページトップにある事件から2年経過する中で「施設の責任を考える」と題した考えや問題提起をしているので合わせて読んでほしい。

岡山集会

事件から3年が来ようとする今年の春、弘徳学園の統括施設長の重利より、「前からやりたいと考えていたが、あれから3年経つ今、集まって話しようか?」と誘われて指定された場所に行った。そこには、久しぶりに会う先輩方々が座っていた。11人がテーブルを囲んで座った。後日、「相模原障害者殺傷事件から3年〜生命の重みを問い、支援と人権を考える岡山集会」の発起人となったメンバーだ。

それぞれが、この事件にどう向き合っているのかを話した。植松被告が発した言葉や「優性思想」「正義感」「生存権」「生産性」「生きる価値」「人材育成」「命」「心」などの言葉が行き交った。重利が主意書にも書いているように、植松被告が「いつからというわけでもなく、障害者が生きていく意味があるのかと思うようになった」責任は施設にあるのではないかと、3年が経つ中で施設のこととはほとんど触れられていない。施設を知る我々が考えないといけないと言われ、更に熱を帯びた感じがした。

毎月集まる中で、植松被告の裁判が来年1月に行われる「とや」の事件に関しての文献等を知った。知れば知るほどこの事件は何重もの問題を抱えているように感じて、自分が迷路にはまっ

まった感じを受けた。気が付けば、いつもこの事件のことを考えているように思えた。

話し合いでは、植松被告の発した言葉(障害者は不幸にするなど)に反論したいという話は初めから出ていた。そしていろんな意見を交わす中で、植松被告や被告の考えに賛同する人々にもたらす社会的な影響も考えたいという話に焦点がしぼられてきた。そして、集会の構成をどのようにするか、登壇者はだれにするか、集会の規模はどのくらいにするか、広報は? 予算は? 資料は? ……

岡山集会は9月22日に決定

定員200人に対し、締め切り10日前には申し込みが定員数を超過してしまうほどの反響があった。

岡山集会当日は、台風の影響の心配をしていたが、なんとか開催を迎えることができ会場もいっぱいの人で埋め尽くされた。集会は2部構成で、午前中は基調報告と第1部、午後から第2部を行った。



基調報告

基調報告は、この集会の実行委員長の重利が述べた。主な内容は以下のとおり。「地域の拠点となるべき施設においてなぜこのような殺傷事件が起きたのか一緒に考えて行動を起そうという集会にしたい。この事件は障害者を分かつている職員が起した事件で、施設(という環境)が植松被告本人に与えた影響は大きいと認識している。障害者の生命が軽んじられている。虐待も同じで障害のある人の一番近い所で起きる。傍にいただけでは対等にならないと確信している。どうしたら彼ら障害のある人たちを幸せにできるのか考えている。そして更に、この事件が突き付けたものとしての自分の考えとして①自分の中に植松がないか。人の命に優劣をつける考え方がどこにあるのではないか。あるならどうするか。②傍にいただけでは差別意識はなくなるらない。③『彼らを見ているうちに障害者が生きている』ことに意味はあるのかと思うようになった」という植松被告の言葉。それは普通であり、そこから二手に分かれるのではないか。意味があるとして考える人もいれば、彼のように安楽死してもいいんだと考える人へ。今の施設は安泰ではない。危ないところや弱いところがたくさんあると思う。障害のある人たちがたくさん集まるところにはリスクはある。」

最後に「このテーマでたくさんの方が集まってくれたことが嬉しい。生命の重さについて若い職員に聞いたら『それは失わないと分からないのではないかと答えた。なるほどと思った。この事件で19人の生命が失われた。このような時に生命の重さについて考えられない施設の職員であってはならないなと思った。真剣に考えたい。』と述べ第1部へつないだ。

第1部 トークセッション

「被告に対する福祉現場からの反論」

岡山で福祉現場を知っている4人が登壇した。障害を持つ子の親であり入所施設の施設長、法人の経営者、通所事業所の管理者、大学の先生という立場で話していた。話は、植松被告がこれまでに発してきた言葉を元に進んでいった。まず、「人の心を失っている人を私は『心失者』と呼ぶ」と言った植松被告の言葉については、4人とも対極の意見を持つていた。援助技術に感性が必要なことや心を大切にしている話が出た。しかし、大学の先生が卒業生の中で福祉現場に就職した職員を対象に行ったアンケート結果を用いて、施設現場の弱みについて指摘がされた。それに対しては、施設の抱える弱みを認識した上で、法人の理念を浸透させるために取り組んでいることや、職員間でのコミュニケーションを日頃から心がけて意識の共有を図っていることなどの話が上がった。



「仕事は楽だった。見守り支援は見ているだけ」といったことについては、「見守り支援は利用者を見て時間や空間を守る」と、高度な支援だ」「植松被告の言う見守りは仕事放棄の状態だ」と。また、「気づき・コミュニケーション・共感の3Kがない状態は業務と言えない」と論じていた。しかし、それでも実際、現場では利用者を軽んじる場面は見られるとの意見に対しては、「職員が利用者を見ているが、職員は利用者からどう見られているのかと頭の片隅にないと植松被告のようになってしまう」「最近では、リスク回避が先になってチャレンジすることを忘れている」などの意見があがった。

「障害者は不幸をつくることしかできません。不幸をばらまく存在であり」について、「利用者から教わる」ことがたくさんあり、困った時の答えもくれる存在であり、不幸と想ったことはない。また、勝手に決めることもない。危ない考えだ」と反論していた。「利用者は社会を変え

られる存在だと教わった。魅力のある現場を作るためには、改めて地域も含めて元気にする使命を持って人材育成に取り組むことが求められている」との話が上がった。第1部は以上だ。

第2部 シンポジウム

「いま問い直す生命の重さ」

第2部は、ジャーナリスト、大学の教授、障害を持つ子供の父親でありジャーナリスト、当法人の重利の4名が登壇して、「この事件をそれぞれの立場から議論した。

植松被告に接見された印象として、どの方も、第一印象は普通の礼儀正しい青年という印象を持ったそうだ。しかし、単純な思考の仕方で応答するなど、年齢に対しては幼い感じもしたようだ。更に、自分が盛り上がったところから抜けられないような印象を持ったそうだ。事件を起さそうと思ったのが平成28年の1月頃で、その1か月後には衆議院議長に手紙を出している。そしてその年の7月には犯行に至っている。思い立った後、それほど考えずに行動に移す人のようだ。

また、接見時に「あなたは障害を持つ子のお母さんに對して良いことをしたと思いませんか？」と聞いたら、植松被告は「はい」と答えたそうだ。「社会

のために役に立ったと思ってる？」の質問にも「はい」と答えたそうだ。そのように植松被告は犯行を世直しという気持ちを持っていたが、最近では裁判も近づいているためか、言っていることが変わってきているとも言われていた。また、他の面では、犯行の1年前には転職を考えていたとも話していたようだ。それが殺害に至った。一人のジャーナリストは「飛躍の仕方が病気のようにも思われる」とも言われていた。それにしても動機はまだ分からない。

岡山集会を通して

岡山集会の中でも何度も話が出ていたが、この事件は遠い所の事件ではなく今いる現場でも起こりうる事件だと認識して考えていきたい。今回の集会をきっかけに多くの人と事件に関することについて話をする事ができた。そして、この記事を書く中で改めて事件や植松被告のことなど調べる機会が作れたことを感謝したい。ある方が「植松被告のいところは何？」と言われた。なるほど彼(植松被告)も一人の人間なのか。植松被告を悪魔に変えた何者かが、自分の中にもあるとすれば、それをも対峙し打ち勝つことができるかと私は信じたい。そしていつの日か、子供たちや若い人に、どうやって私たちが突き付けられたもの乗り越えてきたのかを話したい。

(岡 誠)

みなさんあの事件のことを

覚えていますか？

事件を風化させてはいけない

あのいたましい事件から3年が経ちました。最近テレビや新聞での報道もほとんど取り上げられることもなく、どんな事件だったか記憶が曖昧になっている方もいるのではないのでしょうか？私と同年代（20代後半）の彼（植松被告）は、19人も命を一時にして奪い、27人重症を負わせ障害を持つているという理由だけで人間をまるで人形のように扱ったのです。平成の中でも最悪の殺傷事件ではなかったでしょうか。私の周りの友人や知り合い、また家族にもあの事件のことを話しますが、「ああ、そんな事もあったね。ほんとに怖いよね」といった反応が大半です。人間、記憶は薄れていくものだと思いますが、オウム真理教の地下鉄サリン事件のようなインパクトはなく、人々の記憶からなくなってきたのではないかと恐怖を感じています。3年たった今、私達にできることは何でしょうか？同じ業種として働く私達にはこの事件を風化させない使命があると思います。

事件から3年が経ち

この3年間は、匿名報道の意味や親族の本当の思いはどこにあるのかなどの真相を聞き出すことはできなかったのか等、自分としては時間経過とともに考えたりしていました。また、世の中にある障害者に対する差別意識はどこまで解消されつつあるのか。この事件に対する疑問が解消されない限り、世間からの障害に対する溝も深まるばかりだと考えます。

差別が生まれる理由

また、差別問題にて一番ショックだったことは、被告の意見を元にSNS上にて「正論だ」「障害者はいらぬ」といった声があったこと。賛同する人たちが世の中にはいたのです。世の中には様々な差別問題がありますが、そもそも差別はなぜ生まれるのでしょうか？自分の考えや価値観が同等でなければならぬのでしょうか？自分を認めて欲しいといった、他者からの同意を得ることや、その確認がしたいだけではないのでしょうか？自分勝手な思想が生まれ、見下すことによって差別（自分、周り）と差をつける（は生じてしまう）と私は考えます。

心を失った被告

人間は様々な経験を積むと周囲との「比較」をしてしまいがちです。被告も様々な経験を経てきたと思いますが、あきらかに違っただけはその過程において「心を失ってしまった」とだと思えます。家庭環境、友人関係、社会経験、様々な環境の中で人からの「愛情」を感じることができず、人とは異なるゆがんだ思想を抱くようになったのではないかと思えます。私は、被告自身が誰よりも人からの愛情を欲していたのではないかと思えます。自分という存在を、価値を周囲の人に認めてもらいたかっただけであり、その伝え方が人を殺めてしまうといった最悪な方法であったと考えます。

第2の植松被告を生まないためにも

人生の過程や環境において人が変わってしまう恐ろしさを感じたと同時に、第2の植松被告を生まないためにも今いる利用者や職員としっかりと話をして、互いを認め合う関係を作る中で人の心を育てていく環境を作りたいと思います。また、差別となる根底を無くし、障害を持った方は誰よりも人を「幸せにする」ことを世の中の人に伝えていきたいです。

(中島 悠)

「寄付ありがとうございます」ございました

ファームランドみゆき 様
鈴木 績 様
法要庵ひとひら東山店 様

多機能型事業所「いちにのさん」

フェイスブック始めました!!

今年4月から、就労継続支援B型「わーくセンタ
ー」と生活介護「いちにのさん」が合併し、新たに
多機能型事業所「いちにのさん」としてスタートし
ました。そして、この度フェイスブックを立ち上げま
した。日々の活動や仕事を通して多くの方のいろん
な表情や出来事などをお送りしていきたいと思っ
ます。ぜひ覗いて「いいね」をお願いします。弘徳学
園のホームページから入れます。

(<http://www.koutoku.net/>)

「結婚障害者教育事件」から2年が過ぎました。この
問題、この事件に関する書物は数えきれないくらい発行
されていますが、どれも、無数の元職員に、なぜ19人
もの利用者が救済されねばならなかったのかの疑問に
は、答えていません。

「被害しようぜ」的な被害者は、朝期にヤスコと結
見し取材に応じています。被害者は、「障害」者を救済す
る理由を明確に示しています。「障害者は人を不幸にする
」。「たとえニューエッセのたぐい障害者である職
員がいない」「障害者は、金と時間を無駄にさせるだけの
存在だから安楽死させるべき」。園(つ)き物(つ)つた(つ)ま
うは被害者は、発行当時から語るの確信に貫
りとりもアプ(つ)ています。

被害者の理由を明確ですが、それが救され
て、「なぜ自分は救されなければならなかった」
理由になっているとは到底思えないのです。「
救われたい願望を表現させるべき。元職員が」
言っています。 原稿録取が取れない人が「園」



昨年は台風接近の
ため中止になったJ
OY2でしたが、今
年は天候に恵まれ
10月6日に網浜公
園にて開催すること
ができました。ステ
ー
ジイベントでは、初参
加で60人を超える
県立岡山操山中学

校吹奏楽部の演奏から始まり、ドラムサークル
「Fanta Rhythm」の演奏やカラオケ大会で盛り上
がりました。福祉交流プラザ旭東では、岡大邦楽
部の演奏や華展の催しを行いました。午前中から
フリーマーケットには列ができ、ワークシヨップやe
スポーツコーナーで遊ぶ人達でにぎわっていました。
今年のビンゴ大会の1等は「松坂牛」でした。当日
手伝ってくれたパートナーのみなさんに感謝です。
最後はみんなでうらじやの総踊りを楽しみました。
なお、当日受付にて集められた募金額13,943
円は、日本赤十字社岡山県支部を通じて、被災地
支援等に役立ててもらおうようにしました。



『編集後記』
近年の気候がおかしいと近所の人と立ち話
をした。雨の降り方も以前とは違って局地的
に豪雨になることが増えているように思う。
今年の台風15号や19号は想定を超えた被
害が広がった。昨年の真備町のような被害状
況がニューズで流れてきた。教訓は生かされ
ないのか。

地震や火災はいつ発生するか読めない(諦
めているわけではない)が、台風は数日前から
予想ができる。ハザードマップも見ることがで
きる。しかし、避難をする人は少ないよう
だ。

阪神・淡路大震災の時に、避難場所の体育
館に行ったことがある。真冬だったので体育館
はとても寒くてたまらなかつたが、避難した
人はそこで寝泊まりをするしかない。避難場
所がもっと快適に過ごせる所だと進んで避難
するのはと話したことがある。しかしなか
なかそうはいかないだろう。

やはり隣近所で声をかけあつて助け合う関
係を作っておくべきかと考える。

もうすぐ冬が来る。あ、もうすぐ今年も終
わりだ。1年が早い。

(岡 誠)